

中国と日本の中学生におけるストレス反応とソーシャルサポートの関連

鉄, 拳
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/26138>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 14, pp.89-96, 2013-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

中国と日本の中学生におけるストレス反応と ソーシャルサポートの関連

鉄 拳 九州大学大学院人間環境学研究院

A cross-cultural study of stress responses and social support between Chinese and Japanese junior high school students.

Ken Tetsu (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This comparative research's objective is to demonstrate the relation between stress responses and social support in Japanese and Chinese junior high school students. The subjects were 602 Japanese students and 611 Chinese students. As a result, by comparison of the stress reaction, Japan was intentionally high and it was shown by comparison of social support that Chinese one is intentionally high. Lower than the score became a junior high school students of Japanese junior high school students in China in comparison to stress response is considered to be one that has received more support from the surroundings. In junior high school students in China, "emotional support" and "behavioral support and" is affects the stress response. Junior high school students in Japan, the trend "and behavioral support" is affecting the stress response has been shown.

Key Words: Junior high school student, Stress reaction, Social support, China, Japan

I 問題と目的

思春期という発達段階は、自我の確立や心理的離乳といった発達課題の達成を目前にして、不安や悩みも多く、日常生活や行動における適応の問題や葛藤が生じやすい。こうした段階の子どもたちにとって、彼らを取り巻くストレスの影響は極めて大きいと考えられる(松崎・小林, 2004)。そのため、このような思春期の不適応行動の問題を考えるには、心理的ストレスの在り方についての理解を深めることは重要であろう。文部科学省(2005)による生徒指導上の調査によれば、校内暴力行為およそ3万件のうち中学校が2万3千件、不登校児童生徒およそ12万人のうち中学生が10万人であり、中学生の問題は憂慮すべき状況である(崔・庄司, 2009)。

このように多くの中学生が問題行動や不適応行動を示しており、その背景に様々なストレス状態があると考えられる。特に中学生にとっての学校に関わるストレス状態を考えることは重要である。ストレスについてはその原因であるストレスや緩衝効果もあるソーシャルサポートなどが注目される。

学校ストレスとは、児童生徒が学校生活を送る上で意識的または無意識的に受けているストレスのことであり、教師や友人との対人関係から受けるストレス、先輩・後輩の人間関係の問題から受けるストレス、授業中や進路選択・決定などの学業に関するストレス、規則に関するストレスなどがあげられる(岡安ら, 1992)。三浦・坂野(1996)によると、これら

の学校ストレスやストレス認知の違いによってストレス反応の表出の程度や様相に違いが見られることが明らかになっている。

永田(2005)によれば、中学生の主なストレスは学業、部活動、家族、教師との関係、友人関係の順で強い。適切なソーシャルサポートが生徒のコーピング機能を促し、ストレスを軽減することに影響を及ぼしている指摘されている。

日常の学校生活において観察される様々なストレスのうち、中学生は「教師との関係」、「友人関係」、「部活動」など人間関係に関する出来事を特にストレスフルであると感じていることが明らかにされている(岡安・嶋田ら, 1992)。また、友人関係においてストレスを高く評価している中学生は、抑うつ、不安反応を示す傾向の高いことも報告されている(岡安、嶋田、坂野1993)。このように、児童生徒が学校で適応した生活を送るためには、人間関係にかかわるストレスに対応することが重要である。

Lazarusら(1984)の心理社会的ストレス理論によると、個人がストレスと対面した際、ストレスを認知し、次いでコーピング機能が働き、そこで適切にコーピングが機能すればストレス反応は表出しないが、そうではない場合はストレス反応が現れるとされる。児童生徒の心理的ストレスについて理解を深めるにはコーピングといった個人内要因について考えることも必要であるが、ストレス緩衝要因として近年注目されているソーシャルサポートの視点から考えることも重要であ

る。児童生徒にとっては親、教師、友人といった身の回りの他者が大切なサポート源である。したがって、児童生徒のストレス問題を検討するためには、周囲の他者からどのようなサポートがあり、それがいかなる有効な働きを持っているかを明らかにする必要がある。

近年、中国が市場経済への移行で生活環境や社会習慣が変化しつつあり、それに伴い、小・中学生の心理的健康も注目されてきている。雷・堂野(2003)は中国と日本の中学生のストレスに関する調査を行っている。それによれば、中国と日本における中学生にとってストレスサーとなっているのは、学業成績・友人関係・親の期待に対する不愉快な出来事、そして先生に叱られることである。特に、友人関係におけるストレスが多くかつ強くなっていることは両国に共通していると指摘されている。

また、翟(2006)によれば、中国都市部の中学生は欠席願望を持っていても、不登校に陥らず登校しているという。さらに、中学生の学校忌避感を抑制する要因として、教師関係への適応は友人関係への適応以上に作用していることを明らかにしている。これは、日本での研究で確認された友人関係上の不適応が児童・生徒の学校忌避感の重要な規定要因となっているという結果と対照的で、日中両国の間で違いがある。このように中国及び日本の中学生におけるストレスとストレス対処の在り方の特徴に大きな違いがあると考えられる。しかし、先行研究の雷・堂野の調査対象は中国において中学一年生のみ及び日本において中学二年生のみとなっており、全学年を対象としていない。

また、両国の中学生において、ストレス反応に対しどのようなサポートが有効的な働きをしているかが明らかにされていない。そこで、本研究では中国と日本の中学生全学年を対象に、文化や社会的環境の違いによってストレス反応とソーシャルサポートの在り方がどのように異なるかを明らかにし、今後の両国における中学生への心理臨床的援助の在り方について理解することを目的とする。

II 方 法

調査対象

(1) 中国の中学生：中国は面積が広く、地方によって社会習慣や文化などが異なることから、北方のA市(人口：309万人)と南方のB市(人口：643万人、西の地域の中心都市)に在住の中学生を対象とした。A市内の中学生370名(1年生男子68名、女子67名、2年生男子51名、女子73名、3年生男子61名、女子50名)、B市内の中学生241名(1年生男子40名、女子49名、2年生男子45名、女子38名、3年生男子39名、女子30名)

の計611名であった。

A市とB市は中国において典型的な地方都市であり、その上、中国国内においても、南方と北方の社会習慣、文化差などが特徴的にはっきり分かれているため、各一ヶ所を調査対象と設定し、調査を行う。また、対象となった中学校はその地域において典型的な進学校であり、その地域の学校としての特徴を持たれている。先行研究におけるストレス反応の比較結果、A市とB市の間には有意差がみられなかった。また、ソーシャルサポートの比較結果、A市の方が有意に高いことが示された(鉄, 2010)。

(2) 日本の中学生：日本においても地域差を考慮し、C市(人口：146万人、市域を中心に都市雇用圏人口で全国第5位の規模を持つ)及びD市(人口：31.5万人)の二ヶ所の中学生を対象とした。C市内の中学生309名(1年生男子51名、女子49名、2年生男子55名、女子55名、3年生男子64名、女子25名)、D市内の中学生293名(1年生男子44名、女子44名、2年生男子46名、女子49名、3年生男子50名、女子60名)の計602名であった。

日本は島国であり、C市は日本本土に位置し、対象となった学校もその地域にある典型的な中学校である。D市は、以前から、日本本土とは違う、独自の文化を築き上げてきた。また太平洋戦争後から返還に至るまで、長期間米軍に統治されていたため、アメリカの文化も深く浸透している。以上の二ヶ所を調査対象とし、中国との比較検討を行う。また、先行研究において、ストレス反応とソーシャルサポートを比較した結果、いずれにおいてもC市の方が有意に高いことが示された(鉄, 2011)。

調査手続き

2007年9月から10月にかけて、無記名式の質問紙調査を行った。調査は中国と日本の各中学校の授業の一部を用い、各クラスの担任によって実施された。質問紙には記入に関する教示に加えて、回答によって個人が特定されないこと、研究目的以外には用いずプライバシーは保護されること、回答を中止することも出来ることを記した。

調査内容

質問紙内容は以下の通りであった。

(1) フェイスシート：無記名とし、学年、性別の記入を求めた。

(2) 「ストレス反応尺度」：岡安ら(1992)が作成した先行研究を参考に作成した。岡安らが作成した尺度全体が合計46項目から構成されているが、下位尺度の項目数の大きな偏りや全体項目数が多いことから、本研究で

は中国と日本の中学生に共通できる項目を選んで作成した。内容は抑うつ感、疲労感、身体反応、不機嫌・怒り反応の21項目から構成している。回答は「全くない～いつもある」まで5段階評価を求めた。

(3) 「ソーシャルサポート尺度」：児童生徒を対象としたソーシャルサポート尺度（岡安・嶋田・坂野，1993）などを参考に，15項目のソーシャルサポートを作成した。この尺度では，自分を理解してもらう尺度，具体的な援助やアドバイスを受ける尺度について，父親，母親，教師，友人それぞれから「全くそう思わない～とてもそう思う」の4段階評価を求めた。

中国語版尺度の作成

上記のストレス尺度，ストレス反応尺度の各尺度の項目を中国語に翻訳した後，さらに中国語から日本語に翻訳し直すバックトランスレーション法を実施した。両国における項目の翻訳を日本の大学院で臨床心理学を専攻する留学生2名と筆者で検討を行い，表現の修正を行った。

III 結 果

1. 各尺度の因子構造の検討

本研究で用いた尺度の検討として，ストレス反応及びソーシャルサポート尺度について，中国と日本それぞれの回答に基づき主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析に当たっては，固有値1.0以下および因子負荷量.35以下の項目，複数の因子に高い負荷量を示した項目を除外しながら，解釈可能性を検討しつつ結果を採用した。

1) ストレス反応尺度

ストレス反応尺度の因子分析からは，中国と日本ともに共通した3因子構造が抽出された（Table 1）。第1因子は“自分で自分が嫌になる”などの4項目から構成されており，「自己嫌悪感」因子と命名した。第2因子は“めまいがする”などの2項目から構成されており，「身体反応」因子と命名した。第3因子は“攻撃的になる”などの3項目から構成されており，「不機嫌・怒り」因子と命名した。各因子についてCronbachの α 係数を算出したところ，日本では第1因子より.77，.66，.81，中国では第1因子より.84，.62，.75という値が得られた。

2) ソーシャルサポート尺度

ソーシャルサポート尺度の因子分析からは，中国と日本ともに共通した3因子構造が抽出された（Table 2）。第1因子は“同じような関心や興味を持っている”などの5項目から構成されており，「共行動的サポート」因子と命名した。第2因子は“ケガや病気の時に心配してくれる”などの3項目から構成されており，「情緒的サポート」因子と命名した。第3因子は“進路や勉強のことでアドバイスしてくれる”などの2項目から構成されており，「現実的サポート」因子と命名した。各因子についてCronbachの α 係数を算出したところ，日本では第1因子より.87，.84，.60，中国では第1因子より.77，.76，.60という値が得られた。

2. 各尺度の国別，性別と学年別による差の検討

ストレス反応とソーシャルサポート尺度の関連性を検討するため，変数について相関係数を算出した（Table 3）。

1) 各尺度の下位尺度得点について，国別による平均値についてt検定を行った。

Table 1
中国と日本の中学生におけるストレス反応尺度の因子構造結果

項 目	日 本			中 国		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3
第1因子 自己嫌悪感	$\alpha=.77$			$\alpha=.84$		
15 自分で自分が嫌になる	.08	.06	.01	.99	.17	.02
14 自分が他人よりもおとっている気持ちになる	.76	.02	.07	.77	.09	.05
10 みじめな気持ちである	.70	.04	.04	.53	.17	.05
12 自分が悪い事をしている気持ちになる	.62	.10	.06	.60	.22	.04
第2因子 身体反応	$\alpha=.66$			$\alpha=.62$		
4 めまいがする	.03	.55	.06	.07	.22	.46
3 頭が痛い	.05	.50	.01	.04	.14	.76
第3因子 不機嫌・怒り	$\alpha=.80$			$\alpha=.75$		
21 攻撃的になる	.10	.07	.83	.02	.77	.01
18 イライラする	.14	.14	.67	.09	.66	.01
20 感情の起伏が激しい	.36	.04	.46	.04	.82	.08

Table 2
中国と日本の中学生におけるソーシャルサポート尺度の因子構造結果

項目	日本			中国		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3
第1因子 共行動的サポート	$\alpha=.87$			$\alpha=.77$		
6 同じような関心や興味を持っている	.90	.08	.11	.70	.11	.05
8 一緒に遊びに出かけたりする	.82	.13	.34	.78	.006	.20
2 あなたが誰かにいやなことを言われたときに、なぐさめてくれる	.76	.22	.26	.51	.04	.23
13 あなたの悩みについて話し合ってくれる	.55	.11	.22	.65	.16	.10
5 あなたの話を、いつもよく聞いてくれる	.54	.27	.08	.45	.02	.24
第2因子 情緒的サポート	$\alpha=.84$			$\alpha=.76$		
12 ケガや病気のときに心配してくれる	.04	.89	.03	.14	.90	.09
10 あなたがよい成績をとったり、試合に勝ったりしたとき、心からおめでとうといってくれる	.07	.67	.06	.07	.78	.03
15 あなたのよいところも、悪いところも、よくわかってくれる	.16	.58	.13	.13	.54	.06
第3因子 現実的サポート	$\alpha=.60$			$\alpha=.60$		
1 進路や勉強のことでアドバイスしてくれる	.04	.02	.70	.14	.05	.76
4 あなたの間違っているところ、悪いところを指摘してくれる	.20	.36	.51	.08	.10	.59

Table 3
中国と日本の中学生におけるソーシャルサポート尺度の因子構造結果

	ストレス反応			ソーシャルサポート	
	自己嫌悪感	身体反応	不機嫌・怒り	共行動的	情緒的
自己嫌悪感					
ストレス反応	自己嫌悪感				
	身体反応	.413(**)			
	不機嫌・怒り	.609(**)	.432(**)		
ソーシャルサポート	共行動的	-.161(**)	-.112(**)	-.217(**)	
	情緒的	-.103(**)	-.078(**)	-.178(**)	.733(**)
	現実的	-.104(**)	-.078(**)	-.158(**)	.665(**)

* $p<.05$, ** $p<.01$

・ストレス反応尺度

ストレス反応の下位尺度の比較結果, 「自己嫌悪感」, 「身体反応」及び「不機嫌・怒り」反応のいずれにおいても日本の中学生の得点が中国の中学生の得点より有意に高かった (自己嫌悪感: $t(1211)=7.97$, $p<.001$; 身体反応: $t(1211)=2.62$, $p<.01$; 不機嫌・怒り: $t(1211)=10.63$, $p<.001$) (Table 4)。

・ソーシャルサポート尺度

ソーシャルサポートの下位尺度の比較結果 (Table 4 参照), 「共行動的サポート」, 「情緒的サポート」及び「現実的サポート」においては中国の中学生の得点が日本の中学生の得点より有意に高いことが示された (共行動的サポート: $t(1211)=-17.28$, $p<.001$; 情緒的サポート: $t(1211)=-14.15$, $p<.01$; 現実的サポート: $t(1211)=-18.62$, $p<.001$)。

ソーシャルサポートの国別, 対象別の比較では Table 5 にある通り, 父親, 母親, 教師と友人からのサポートで

は中国の中学生の方が高いことが示された (父親サポート: $t(1211)=-17.58$, $p<.001$; 母親サポート: $t(1211)=-10.55$, $p<.01$; 教師サポート: $t(1211)=-20.01$, $p<.001$; 友人サポート: $t(1211)=-4.56$, $p<.001$)。

2) 各尺度の得点について, 学年と性別による平均値についてt検定を行った (Table 6 参照)。

学年による差では, 一年生, 二年生, 三年生のいずれにおいても, ストレス反応では日本の方が有意に高く ($t(407)=5.45$, $p<.001$) ($t(410)=4.80$, $p<.001$) ($t(387)=5.74$, $p<.001$), ソーシャルサポートでは中国の方が有意に高かった ($t(407)=-10.5$, $p<.001$) ($t(410)=-10.3$, $p<.001$) ($t(387)=-11.4$, $p<.001$)。

性別による差では, 男子生徒, 女子生徒いずれにおいても, ストレス反応では日本の方が有意に高く ($t(610)=5.75$, $p<.001$) ($t(598)=7.71$, $p<.001$), ソーシャルサポートでは中国の方が有意に高かった ($t(610)=-14.5$, $p<.001$) ($t(598)=-12.2$, $p<.001$)。

Table 4
T検定による各下位尺度の平均・標準偏差・有意確率

		日本 (n=602)	中国 (n=611)	t 値	
		平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)		
サポート	共行動的	2.45(0.51)	2.94(0.48)	-17.28	***
	情緒的	2.91(0.65)	3.39(0.52)	-14.15	***
	現実的	2.69(0.55)	3.27(0.53)	-18.62	***
ストレス反応	自己嫌悪感	2.10(0.89)	1.70(0.85)	7.97	***
	身体反応	2.22(1.03)	2.07(0.90)	2.67	**
	不機嫌・怒り	2.37(1.06)	1.77(0.90)	10.63	***

* $p<.01$, *** $p<.001$

Table 5
中国と日本の中学生におけるソーシャルサポートの対象別による平均・標準偏差

対象別	ソーシャルサポート		t 値	
	平均 (標準偏差)			
父親サポート	日本：2.44 (0.78)	中国：3.17 (0.65)	-17.58	***
母親サポート	日本：2.90 (0.73)	中国：3.30 (0.58)	-10.55	***
教師サポート	日本：2.18 (0.68)	中国：2.91 (0.59)	-20.01	***
友人サポート	日本：3.03 (0.71)	中国：3.20 (0.57)	-4.56	***

*** $p<.001$

Table 6
中国と日本の中学生におけるストレス反応とソーシャルサポートの学年と性別による平均・標準偏差

	N	ストレス反応			ソーシャルサポート	
		平均 (標準偏差)	t 値	有意確率	平均 (標準偏差)	t 値
一年生	日本：188	日本：2.20 (0.81)	5.45	***	日本：2.67 (0.50)	-10.5 ***
	中国：224	中国：1.76 (0.74)			中国：3.15 (0.42)	
二年生	日本：205	日本：2.18 (0.79)	4.8	***	日本：2.65 (0.50)	-10.3 ***
	中国：207	中国：1.82 (0.69)			中国：3.14 (0.46)	
三年生	日本：209	日本：2.29 (0.77)	5.74	***	日本：2.59 (0.51)	-11.4 ***
	中国：180	中国：1.84 (0.75)			中国：3.13 (0.41)	
男子生徒	日本：310	日本：2.09 (0.79)	5.75	***	日本：2.54 (0.53)	-14.5 ***
	中国：304	中国：1.74 (0.71)			中国：3.11 (0.46)	
女子生徒	日本：292	日本：2.34 (0.78)	7.71	***	日本：2.74 (0.46)	-12.2 ***
	中国：309	中国：1.87 (0.74)			中国：3.17 (0.39)	

** $p<.01$, *** $p<.001$

3. 中国と日本の中学生におけるストレス反応関連要因の重回帰分析による検討

中国と日本の中学生におけるストレス反応関連要因の国別による差異を探るため、ストレス反応を従属変数、ソーシャルサポートの「共行動的サポート」、「情緒的サポート」、「現実的サポート」の3つの下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行った (Table 7)。中国の中学生においては、「共行動的サポート」と「情緒的サポート」がストレス反応に負の影響を及ぼしていた。日本の中学生においては、「共行動的サポート」がストレス反応に

負の影響を及ぼしている傾向が示された。「現実的サポート」は中国と日本の中学生においてはストレス反応に影響を及ぼしていないことが分かった。

IV 考 察

1. 中国と日本の中学生におけるストレス反応の比較

ストレス反応の比較では日本の方が高く、下位尺度の比較では、「身体反応」、「自己嫌悪感」と「不機嫌・怒り反応」のいずれにおいても日本の方が高いことが示さ

Table 7
「ストレス反応」を従属変数とした重回帰分析結果

中国			日本		
R ²	独立変数 (標準偏回帰係数)		R ²	独立変数 (標準偏回帰係数)	
.204***	共行動的 (-.117**)	情緒的 (-.151***)	.145**	共行動的 (-.117+)	情緒的 (-.087n.s)

(+ $P < .10$, * $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$)

れた。この結果から、日本の生徒達は中国の生徒と比較してストレス反応を高く表出していることがうかがわれる。特に、「めまいがする」「頭が痛い」といった身体反応、「攻撃的になる」「イライラする」といった不機嫌・怒り反応や「自分で自分が嫌になる」「自分が他人よりもおとっている気持ちになる」といった自己嫌悪感において高くなっていると考えられる。

鉄 (2010) は中国の中学生に対し、ストレス反応について因子分析を行った結果、同一の解釈が可能な「自己嫌悪感」、「不機嫌・怒り反応」、「身体反応」、「疲労反応」の4因子を抽出している。鉄 (2011) は日本の中学生のストレス反応について因子分析を行い、同一の解釈が可能な「自己嫌悪」、「身体反応」、「不機嫌・怒り反応」、「心身反応」の4因子を抽出している。上述の結果から、両国の中学生のストレスに対する捉え方に違いがあることがうかがわれる。即ち、中国の中学生は「疲労反応」としての捉え方が特徴的で、日本の中学生は「心身反応」としての捉え方が特徴的と考えられる。

于・猪木 (2003) は中国の小学生のストレスについて検討し、長い間、保護者や教育者は子どもの成長に対して、子どもの飲食、身体の状態、学業成績、進学のための試験及び優等生への教育などの問題に注意を払ってきたが、子どもの発達と密接に関わっている心理状態の問題が重視されていないと指摘している。このことから、長い間中国国内では子どもの心理状態といった側面に保護者や育者の意識も乏しく、目を向けて来なかった現状があるといえよう。また、子どもたち自身も心理状態やストレスなどの自身のことについて意識が少ない環境におかれていることが考えられる。金子ら (2001) はストレス対処行動としてのコーピングについては中日間で対照的な傾向を示しており、中国では努力、気分転換という主体的・積極的なストレス軽減行動をとろうとするのに対し、日本は他者の援助を求めたり、運が悪いと諦めるような傾向があると指摘している。日本の中学生のストレス反応が高いことには、ストレス緩衝要因である個人のコーピングと周りのサポートといった側面が関連していることが考えられる。

2. 中国と日本の中学生におけるソーシャルサポートの比較
ソーシャルサポートの対象別の比較において、下位尺度では「同じような関心や興味を持っている」「一緒に

遊びに出かけたりする」といった共行動的サポートや、「怪我や病気の時に心配してくれる」「あなたがよい成績をとったり、試合に勝ったりしたとき、心からおめでとうとってくれる」といった情緒的サポート、「進路や勉強のことでアドバイスしてくれる」「あなたの間違っているところ、悪いところを指摘してくれる」といった現実的サポートにおいても中国の方が高いことが分かった。中国の生徒がより多くサポートを受けていることが考えられる。

金子ら (2001) は中学生のストレス状況について中日間の比較検討を行い、ソーシャルサポートについては、中国の中学生の方が日本の中学生より総じてより強いサポートを得ていると述べている。また、中国では親の子どもに対する期待も大きく、家庭での生活面での過保護、それとともに学業に対する厳しさ、これらが子どものセルフ・コントロールに影響を及ぼすのではないかとされている (崔・庄司, 2009)。本研究ではソーシャルサポートの対象別の比較において、両親からのサポートは中国の方が日本より高い結果が示された。1980年代から正式に実行され始めた「一人っ子」政策は、“英才教育”に拍車をかけることになり、両親や祖父母が一人っ子に惜しむことなく愛情を注ぎ、子どもの療育費や教育費は都市部家庭で最大の出費となっている (翟, 2006)。中国において、このような「一人っ子」政策などの社会環境から、親の子どもに対する期待も大きく、家庭での生活面でのサポート的な関わりが多いと考えられる。右高 (2009) は日本の中学生は家庭生活では「親が忙しすぎる」や「気もちを分かってくれない」と感じ、ストレスを抱えながら家庭生活を送っている人が多いと指摘している。また、右馬ら (1997) は児童生徒の父親と母親のソーシャルサポートの日韓比較結果、韓国の得点が有意に高いと指摘している。日本は他国との比較では親からのサポートが一般的に低いことがうかがわれる。以上のことから、ソーシャルサポートの比較では中国の中学生が親からのサポートをより多く受けている結果となったと推測される。

学校は教育を受ける最も重要な場所として、一番大事な役割を担っているのは教師である。古くから教師は尊敬されるべき、礼儀的に付き合うべき存在であるという認識は中国の文化の一部として広く受け入れられている (翟, 2006)。翟 (2007) は中国の中学生の学校生活満足

度とスクール・モラルとの関連および学校生活に対する認識について検討し、中国の中学生は自分の学校生活に対して、ポジティブあるいはネガティブに評価するとき、ほとんど「友人付き合い」「教師関係」「学業」に集中していると指摘している。翟（2006）は中国の中学生の学校忌避感を抑制する要因として、教師関係への適応は友人関係への適応以上に作用していると指摘している。学校生活における教師との関係が中学生に対し大きな影響をもたらしている。教師との関係が密接型である青少年は心理的健康度が一番高く、教師の期待は児童生徒の学業成績、自己価値観、学習達成動機に関連していることも明らかになっている。本研究での教師からのサポートの比較結果、中国の方が日本より高いことが示されたのも、このような中国社会において、教師に対する認識と実際の教師との関係性が作用していると考えられる。一方、日本では学校や児童生徒を取り巻く教育状況は、いじめ問題、そして中国ではあまりみられない不登校、学級崩壊、ひきこもりなどがあり、また、精神性疾患で休職した公立学校の教員数は年々増加傾向であるなどの多くの問題を呈している。このような問題は教師と生徒との関係性に大きく影響を与えていて、中国と比較して教師からのサポートはそれほど機能していないことが考えられる。

教師のサポート、関心、励まし、期待と参与は生徒の学習することに対する積極性を促進するだけでなく、生徒の自尊心と価値観を高めることができ、教師との間に信頼関係を築くことに役立つと考えられる。生徒は、教師が自分に対し関心と期待をもつと感じると、自分が認められ、自分は価値のある人間だと認識、自我価値観のレベルを高くする効果がある。教師に認められ、励まされる生徒は教師に対して敬う態度をとる。日ごろからの信頼関係があれば、生徒は教師の言葉に反応して積極的に授業に参加し、教師の期待に応じて頑張る意欲も出てくると考えられる。逆の場合、教師に叱られたり、消極的に評価されたりする経験は、子どもの不安を増強させ、自尊心と自信が傷つき、教師と信頼関係を結ぶことが困難になると推測できる。そういった状況が長期的に続くと、学習する意欲が下がり、学習効率と学業成績にマイナスの影響を与える可能性がある（翟，2007）。本研究で、教師からのサポートの比較結果は中国の方が日本より高いことが示されたのも、このように中国社会においての教師に対する認識と実際の教師との関係性が作用していると考えられる。

中国の中学校では基本的に3年間クラス替えを行わず、1年生から3年生まで同じメンバーが同じクラスにすることが普通である。生徒たちはクラスに慣れ、友人関係も慣れた環境の中でよくなってきて、学級や友人に認められ、よい関係をもっている感覚は高い。右高

（2009）は日本の中学生は学校生活の核となるのは友人と勉強であり、最も大きなストレスになるのはやはり「友」であると指摘している。このことで友人からのサポートの比較結果、中国の方が高いことを示したと考えられる。

3. 中国と日本の中学生におけるストレス反応関連要因

中国の中学生においては、「共行動的サポート」と「情緒的サポート」がストレス反応に負の影響を及ぼしている。日本の中学生においては、「共行動的サポート」がストレス反応に負の影響を及ぼしている傾向があった。「現実的サポート」は中国と日本の中学生においてはストレス反応に影響を及ぼしていないことが分かった。

「進路や勉強のことでアドバイスしてくれる」「あなたの間違っているところ、悪いところを指摘してくれる」といった現実的サポートが両国の中学生のストレス反応の緩衝に影響を及ぼしていない。細田ら（2009）は中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感について検討し、自他への肯定感の高い中学生の方が共行動的サポートの得点が高く、親子間や友人間での共行動的サポートの有効性があると述べている。本研究でも、一緒に遊びに出かけたり、話しあったりする共行動的サポートは中国と日本の中学生のストレス緩衝に有効である結果が得られていて、先行研究と類似の結果となった。自分のことを心配してくれたり、分かってくれたりする情緒的サポートの方が中国の中学生にとってストレス反応の緩衝に影響を及ぼしている。その結果ストレス反応は日本ほど表出していないことが考えられる。今後の援助方法として、中国と日本においては、何かにアドバイスしたり、指摘したりする現実的サポートをより充実させて、中学生がより受け入れやすいように関わることがストレス反応の低減に有効的だといえよう。また、日本の中学生にとって、自分のことを心配してくれたり、分かってくれたりする情緒的サポートをより充実していくことがストレス反応の低減に有効と考えられる。

付 記

本稿の調査及びまとめにあたり、ご協力を頂きました中国と日本の中学生の皆様、ご指導を頂きました九州大学大学院人間環境学研究院教授塚塚進先生に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- 細田 純・田蔭誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究. 教育心

- 理学研究, 57(3), 309-323.
- 金子昭榮・胡 勇 (2001). 中学生のストレス状況に関する中・日比較. 金沢大学教育学部紀要. 教育科学編, 50, 159-175.
- 雷 秀雅・堂野佐俊 (2003). 中国及び日本における思春期の心理的ストレスとその要因. 研究論叢. 芸術・体育・教育・心理, 52(3), 9-25.
- 三浦正江・坂野雄二 (1996). 中学生における心理的ストレスの継時的変化. 教育心理学研究, 44(4), 368-378.
- 松崎多千代・小林 真 (2004). 中学生の学校ストレスとストレスコーピングの有効性 - 友人ストレスと学業ストレスに注目して -. 富山大学教育学部研究論集, 7, 19-26.
- 右高和生 (2009). 児童・生徒の学校と家庭における生活とストレス: 市内小学生と中学生の実態調査の結果から. 現代教育学部紀要, 1, 179-189.
- 右馬埜力也・洪 光植・嶋田洋徳・鈴木伸一・三浦正江・坂野雄二 (1997). 児童生徒の学校ストレスの日韓比較 (2): 中学生を対象として. 日本教育心理学会総会発表論文集, 39, 229.
- 永田雄子 (2005). 中学生におけるソーシャルサポートが及ぼすストレス軽減について. 臨床教育心理学研究, 31(1), 110.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹波洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係. 心理学研究, 63(5), 310-318.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス低減効果. 教育心理学研究, 41, 402-412.
- 翟 宇華 (2006). 中国都市部中学生の学校忌避感を抑制する要因に関する研究. 教育心理学研究, 54, 233-242.
- 翟 宇華 (2007). 中国における中学生の学校生活満足度とスクール・モラルとの関連および学校生活に対する認識. カウンセリング研究, 40(1), 17-25.
- 崔 玉芬・庄司一子 (2009). 親の養育態度と中学生のセルフ・コントロール: 中国と日本の比較分析に基づいて. 日本教育心理学会総会第51回大会発表論文集, 322.
- 鉄 拳 (2010). 中国の中学生におけるストレス, ストレス反応及びソーシャルサポートの地域特性. 九州大学心理学研究, 11, 63-70.
- 鉄 拳 (2011). 中学生のストレス・ストレス反応及びソーシャルサポートの地域特性 - 沖縄と福岡の比較を通して -. 九州大学心理学研究, 12, 69-77.
- 于 沙・猪木省三 (2003). 中国における小学生のストレス: ストレスラーを中心として. 県立広島女子大学生生活科学部紀要, 9, 129-143.